洗建先生の教授職御退任に寄せて

洗建先生が、とうとう本年三月三一日をもってご定年を迎えられることになった。本来なら、お祝い申し上げるべきなのであろうが、またお一人、看板教授が本学を去られると思うと、寂しくてやりきれないというのが実感である。

先生が本学にご就任されたのは、昭和五三年（一九七八年）四月一日であり、あと二ヵ月余りで四三歳を迎えようとする時であった。その前年、佐々木宏幹先生（現駒澤大学名誉教授）のご推薦により、山折哲雄先生（後の国際日本文化研究センター所長）の後任として洗先生の人事案件が浮上した時、教室主任の松田文雄先生（後の駒澤大学総長）のご指示により、助手の私は、用賀に居を構えておられた東京大学教授の柳川啓一先生宅へ「推薦状」を頂きに伺う機会に恵まれた。駆け出しの私は、柳川邸が近づくにつれて、心臓がはちきれんばかりになったが、優しく出迎えて下さった柳川先生とどのような会話を交わしたのかほとんど記憶にない。ただ別れぎわに、腰を深々とかがめられて「洗君を何卒よろしく」と先生に言われると、洗先生とはどのような先生なのであろうかと、あれこれ想像したことが、ついこの間のことのように思われる。早いもので、あれから二九年が経過したことになる。

先生がご就任されて間もない頃、日本民族学会（現日本文化人類学会）開催の話しが文化学教室に舞い込んできた。この学会は全国学会であり、教室のメンバーが一丸となってはじめて学会開催が成功するほどの大規模のものである。この学会は、大会当日、開催校の責任において『研究発表抄録』を刊行するのが慣例であるが、その抄録には各出版社の広告を掲載する伝統がある。この広告掲載料が開催校の貴重な運転資金となるため、学会開催の準備段階においては、各出版社に広告掲載の承諾を得るための交渉をしなければならない。このやっかいな担当をお引き受け下さったのが洗先生であった。当時、先生は玉川校舎で「宗教学Ⅰ」の講義を二コマ終えられると研究室に立ち寄られ、広告掲載依頼の電話を各出版社に順にかけつづけられるのであった。講義後で、くたくたに疲れておられるはずなのに、いやな顔もされずに、ただひたすら電話で交渉されておられる姿が印象的であった。そして、大会当日には、一番乗りで大学に来られると、教室の窓を開けて空気の換気をされ、汚れている机を雑巾で拭かれるなど、細心の注意を払って下さったのである。洗先生は、何とすごい先生なのだろうと感じた最初の経験であった。

そうした先生の姿勢は、その後、文化学教室で担当した日本民俗学会（この学会は歴史学科と共催で行われた）や日本宗教学会などの大規模な全国学会の開催においても、まったく変わるところがなかった。こうした先生のいわば裏方さんに徹する態度は、どうやらかつて助手の経験をされたことと関係がありそうである。先生は、大学院博士課程を修了されると、東京大学文学部助手にご就任されておられる。そして、助手としての最初の仕事は、昭和四〇年代の半ばまでふきあれた学園紛争で埃りまみれになっていた研究室の茶碗洗いであったと先生よりお聞きしたことがある。恐らく、そうした自らの経験を踏まえて、裏方さんの重要性を熟知しておられ、そのことが学会を開催する際の姿勢に反映されていたと思われるのである。

先生がご就任された時の文化学教室のスタッフは、五〇代が一人、四〇代が四人、三〇代が二人という年齢構成であった。当時の本学には、まだ七〇歳の定年制はなかった（大学院担当教授は七八歳まで在任された）ので、文学部の構成員にはご高齢ではあるが著名な先生方が大勢在籍しておられた。そうした文学部の各セクションの中で文化学教室は最も若い教室であった。教室のメンバーが若いことは、それだけで親睦のための飲み会へと展開するに十分である。月に一度の教室会議や教授会の後は、たいてい飲み会になることが多かった。先生はいつも穏やかで、決して乱れることはなく常に紳士的であり、最後まで付き合って下さった。大学の先生とはこのようなものかと思ったものである。

ある年の六月のことであった。午後四時過ぎから始められた教室会議はすぐに終わり、例によって飲み会となり、終了したのは夜中の一二時頃であった。私は先生を恐る恐る二次会にお誘いしたところ、ご快諾して下さったので河岸を変えた。そこでは飲むというよりも、話し込んだという感じであったが、気がつけば朝の六時である。先生は直ちにタクシーで中野のご自宅にお帰りになられたが、実は、二人とも朝九時から講義があったのである。このような時、大学まで徒歩一〇分の所に住んでいた私には有利であったが、朝、研究館に行ってみると、女子職員のBさんが私を呼びかけ、「洗先生は先程お見えになられ、当日休講にすると学生が気の毒だから来たんですよと仰しゃって、真っ赤なお顔で教室へ行かれました」と教えてくれたのである。この例から知られるように、先生は常に学生本位に考えておられるのである。先生の名誉のために付記しておきたいことは、このような朝六時までお付き合いいただいたことは、在職二八年間のうちこの日だけであったという点である。とにかく、学生へのこうした気遣いはあらゆる面に現われているようである。

先生の講義では、知識を覚えさせるのではなく、問題意識を呼び起こし、自ら考えさせることを目標にして行っているという。こうした成果は受講者数に現われている。例えば、先生ご担当の教養科目「宗教学」一コマの受講者数は、平成一五年度は七八五人、一六年度は九六一人、そして、一七年度は一三一二人であった。ご定年を迎えられる本年度は、ついに一三〇〇人以上を数えたのである。このように受講者が年々急増の一途を辿っていることは、先生の講義内容がいかに学生の心をつかんでいるかという何よりの証左だといえよう。

かつて専門科目の「新宗教概説」をご担当されていた時には、講義で取り上げた新宗教教団のうち一つを選んで、見学会を実施するという方法が採られていた。以前、私も誘われて杉並区の立正佼成会本部に受講生と共に参加したことがある。教団本部の指導者に学生たちがさまざまな質問をしたり、意見交換をするなど、誠に有意義な見学会であった。こうした方法は、大学院仏教学専攻の演習「宗教学特講」においても採用され、毎年、一泊二日の予定で見学会が行われ、院生にはすこぶる評判がよい。先生は、かつて母校の東京大学で非常勤講師をされたことがある。講義の内容はご専門の宗教法に関するものであったが、その講義に感銘した受講生が、翌年、宗教法で卒業論文を作成し、出来上がった論文のコピーを先生に謹呈されるという教師冥利につきる出来事があった。駒大であれ、東大であれ、学生への気遣いに変わりはなく、先生のお人柄のなせるわざであろう。

略歴に見られるように、先生は、当時、全国一の進学校として知られていた名門、東京都立日比谷高等学校のご出身である。そして、早稲田大学教育学部国語国文学科・同大学院修士課程国文学専攻を修了されている。通常なら、国文学者として身をたてていかれるのであろうが、先生は宗教学を勉強されるために、改

めて東京大学文学部宗教学宗教史学科に学士入学された後に、同大学院修士課程・博士課程を修了された。文字通りの篤学の士であられる。大学院在学中には、脇本平也先生（東京大学ご定年後、昭和五六年四月から平成五年三月まで一二年間、文化学教室教授）のもとで、宗教心理学、宗教思想史を学ばれ、また、柳川啓一先生（仏教学部非常勤講師として新宗教概説を担当）のもとで、祭と地域社会の調査ゼミに参加されるなど、理論と調査との双方を学ばれている。大学院の頃は、フロイトを主とする精神分析学派の宗教論の領域と、新宗教運動の思想を対象とする研究を行っておられる。

大学院修了後は、東京大学助手を経て、文化庁宗務課に入られる。この頃から、現在ご専門とされている「宗教法」の宗教学的研究に着手されることになる。この当時、「宗教に関する法律の研究は、専ら法学の立場からの研究にゆだねられ、宗教学、あるいは神学の立場からの研究・論考はほとんどなされてきていない」（洗建「法と神学の間」『駒沢大学文化』第五号）という状況であったという。この意味において、宗教法の宗教学的研究はまさに未開拓の領野への挑戦であり、想像を絶するほどの茨の道であったと想像される。だが、先生は着実に実績を積まれ、現在では斯学の第一人者として夙に知られるに至っている。宗教法の宗教学的研究は「宗教法を支える規範や価値観の形成と、宗教文化が提供する世界観や人間観の関係、法律上の宗教の概念などが研究対象となる」（『脚下照顧』下巻、二〇〇〇年版）という。

こうした専門性は高く評価され、請われて先生は、例えば、箕面市の遺族会補助金事件において大阪高裁鑑定証言を行っておられる。また、参議院宗教法人等特別委員会においては、参考人として意見陳述をされておられるが、この時の様子はＮＨＫテレビで全国中継されている。先生が顔色一つ変えず、堂々と見解を述べられている姿は賞讃され、今でも語り草になっている。先生は決してタレント教授ではないが、あくま

でもその専門性が買われて、テレビ朝日の「朝まで生テレビ」にご出演されたこともある。すこぶる温厚な先生ではあるが、ご意思は強く安易な妥協は許さない。そうした姿勢がテレビを見ている者を共感させているのであろう。

洗先生のイメージといえば、いつも背広にネクタイ装着というスタイルではあるまいか。大学でお会いする際には、夏の暑い最中でも、それ以外の姿を私は見たことがない。禅では「まず形から入る」という教えであるが、まさに先生のスタイルは禅の精神を体現されているといえよう。その先生がご退職を前にされて、唯一の心残りと言われるのは、長年にわたる文化学教室の願いとして建言してきた学科設立が実現しないままになっている点であるという。これに関しては今後の課題であるといえるが、さしあたり文化学教室は、この四月より文学部の所属を離れて、新設される総合教育研究部に所属し、しかも文化学部門と名称を変えて再生する予定となっている。したがって、洗先生のご退職は、文学部文化学教室の教員としては最後のご退職者となられるのである。

教室主任を二期勤められ、また、学界では日本宗教学会常務理事・理事・評議員、宗教法学会理事、駒沢宗教学研究会理事などを勤められるなど、内外ともにご活躍されておられる先生には、くれぐれも健康に留意され、これまで通り私たち後進のご指導をお願いしたいと切に思う次第である。

（佐藤憲昭）